（様式４）

令和５年３月２３日

富山県教育委員会教育長　殿

富山県立氷見高等学校
校長　三津島　淳

令和４年度学校総合評価を別紙（様式５）とともに提出します。

令和４年度　学 校 総 合 評 価

６　今年度の重点目標に対する総合評価

本校では、(1)知性の向上、(2)品性の向上、(3)信頼される学校づくりの３つの観点から重点目標を設定し、学校経営に係る課題に取り組んだ。

（１）　知性の向上に関しては、生徒の家庭学習時間調査と指導、及び教員の授業改善の両面から取り組んだ。前者は、学習の基礎・基本の定着及び生徒個々の主体的な学習態度の育成を目指した。後者は、教員がそれぞれの教科で「主体的・対話的で深い学び」の実践とＩＣＴ 機器を活用した学習指導の向上を図った。

この結果、前者では、教科や学科が行う小テストや資格検定等の指導、観点別評価により指導と評価の一体化を目指す取り組みが、生徒の達成感や自信に繋がるという点で有効であった。また、生徒自身が達成感を得る授業づくりについては課題が多い。より思考力を磨く学習意識の向上に向けた改善は、今後も引き続き求め続けねばならない大きな課題である。

後者では、ＩＣＴ機器の活用が授業だけでなく調査やアンケートなど多様な教育活動に浸透してきており、学習時間調査等でも有効であることが実証された。引き続き、生徒の学習のモチベーション向上への、一層の取組の改善を進めたい。

（２）　品性の向上に関しては、「安全安心に過ごせる氷見高校社会」の視点で、生徒と個々の面談及び全校集会等の機会をとらえて本校生徒としての所属意識と矜持を意識化し、社会規範を遵守する心の育成と自律的態度の向上を目指した。今年度もコロナ禍の中ではあったが、学校行事や課外活動、各種大会等を生徒の活躍の場としてできるだけ日常に近い形で実施するよう努め、生徒の高い満足度を得ることができた。主体的な活動の中で自己有用感を高め、本校への所属意識を高めた結果が高い満足度に繋がったと考える。また、ルール、マナーに関する生徒の意識調査では、昨年度同様高いレベルの結果となっている。

（３）　信頼される学校づくりに関しては、家庭や地域とのより良い連携の推進を目指した。家庭については、「氷高ほっとメール」(教育情報メール)への登録数はさらに増加し連絡体制が良化している。また、１年次の「未来講座 HIMI 学」や２年次の「探究基礎」「シチズンシップ」においては、地域をフィールドとする学びに関する地域社会との協働が一層進むことで、地域社会からの認知度や理解度が増し、協力体制も強くなっている。各学科の課題研究やボランティア活動等においても地域社会との連携は大きく広がり、本校の魅力の一つへと認知されてきている。

７　次年度へ向けての課題と方策

今年度、新学習指導要領が本格実施され、授業における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、一層の授業の質的改善を図る必要がある。特に、本校の特長となりつつある探究的な学びが生徒の教科学習への学びのモチベーション向上へと繋がるプロジェクトについて、次年度以降取り組む必要がある。

様々な教育活動の場面において、「自育」する力、「連携」する力、「探究」する力の向上というスクールポリシーに基づいた目標設定を具体的に図ることが求められる。今年度、野球部等の活躍により生徒の本校への所属意識の価値が一層高まりを見せている。地域協働の価値と共に、他者との関わりの中で自分を顧み、自己理解と自己有用感の涵養に一層努めさせたい。

「地域との協働による学習活動」は、新学習指導要領が目指す「学びに向かう力」を育むために、身近な地域課題を題材にして、自ら問いや仮説を立て検証して思考することを繰り返しながら、主体的に学ぶ取組である。そこから教科学習へのモチベーションの向上に繋げ、生徒一人ひとりの進路の実現にも繋がる活動となる。地域の方々と協働しながら、課題発見や問題解決に必要な力を育む学びとなるよう工夫する、さらなる指導の充実とマネジメントが課題である。

（様式５）
８　学校アクションプラン

令和４年度　氷見高等学校アクションプラン　－１の１－

重点項目	学習活動（生徒の主体的な学び）
重点課題	授業及び家庭学習への意欲の醸成

現　状

①　【家庭学習時間】

本校では、１学期と２学期の期末考査中の学習時間調査を全学科、全学年の生徒を対象に実施している。過去３年間の結果を下表に示す。昨年度は定期考査前の調査期間を拡張したため一昨年よりも、やや学習時間が少なくなっている。また、定期考査前の準備期間の取りかかりが、特に休日について低調に見える。

学　科	普通科		専門学科	
２学期末考査期間の学習時間	平日２時間以上(%)	休日３時間以上(%)	平日２時間以上(%)	休日３時間以上(%)
令和元年度	68	64	36	25
令和２年度	81	80	52	53
令和３年度	79	72	44	36

そのため、平日2時間以上、休日3時間以上の学習時間について、今年度は普通科の達成目標を70%から75%に上げ、専門学科は40%を目標として設定したい。一方で、準備期間を含めて平常の授業期間の予習復習の様子を見ると、習慣化して十分な家庭学習を行っているとは言えない現状に注視して指導したい。

②　【専門学科検定合格】

専門学科では、各学科の専門性を高める各種検定の取得を重視する指導を行っている。昨年度の実績は下表の通りとなった。

農業科学科	卒業時に検定取得平均10.4種目
海洋科学科	食品技能検定Ｉ類55%および水産海洋技術検定合格率60%
ビジネス科	卒業時に全商検定１級合格のべ88件
生活福祉科	家庭科技術検定1級合格者のべ66名

昨年度は農業科学科と生活福祉科で十分に目標値を達成することができたが、各学科とも年度によって生徒の習熟の具合が異なるため、今年度も昨年度と同じ目標値を設定し、各学科、全学年で積極的に検定に挑戦させたい。

達成目標

①　２学期末の定期考査１週間前からの家庭学習の時間
　平日２時間以上　休日３時間以上
　普通科･･･75%以上
　専門学科･･･40%以上

②専門学科検定合格状況
(農)卒業時に取得検定平均７種目以上
(海)食品技能検定第Ｉ類、水産海洋技術検定の合格者60%以上
(ビ)卒業時、全商検定１級合格100件以上
(生)家庭科技術検定１級合格者50名以上

方　策

・昨年度は調査期間を考査１週間前からに広げることで、考査に向けての家庭学習の必要性を生徒に意識させた。今年度は、考査期間以外でも学習時間調査を行い、生徒の家庭学習の実態をさらに把握するとともに、適切な家庭課題の提示やＩＣＴを活用し、学習への意欲の向上を図りたい。
・担任はアンケート調査や個人面接等で生徒の実態把握に努め、生活リズムの改善や各自の進路目標達成に向けての学習意欲の向上を促す。
・授業中にスモールステップでの小テストなどを重ねることで、予習の習慣を定着させるとともに、学習による達成感を得させる契機とする。また、観点別評価を取り入れることで、主体的に学びに向かう姿勢を育てていきたい。
・年２回実施している互研授業週間において、ICTの活用や観点別評価を取り入れた研究授業を行うことで、主体的な学びにつながる授業改善を全教員で行っていきたい。

達成度

①普通科　平日２時間以上　77.7%
　　休日３時間以上　64.0%
　専門学科　平日２時間以上　46.0%
　　休日３時間以上　35.7%

(農)　９．３５種目　　目標達成
(海)　５７%
(ビ)　６２件
(生)　３９名

具体的な取組状況

・１年生は、２学期より ICT を活用し家庭学習時間を入力させる取組を行っている。また、２年生でも毎日学習時間記録票を提出させ、担任がチェックを行っている。このような取組で、家庭学習への意識をコロナ禍にあっても維持している。専門学科は検定向けての放課後学習を実施するなどの対策を行った。

評　価	①　B	②　B
学校関係者の意見	ICT や記録票を活用した学習時間調査などそれぞれの学年等での工夫が効果として出ている。	コロナ禍の３年間ではあったため、生徒が目標を持って取り組んだが、目標値に及ばなかったと考える。

次年度へ向けての課題

・１．２年生については、１学期より２学期の方が、学習時間が長くなる傾向が見られたが、休日の学習時間をまだまだ増やしていく必要がある。与えられた課題をやるだけでなく、主体的にじっくりと学習に取り組む姿勢や部活動との両立の意識を高めていく必要がある。

（評価基準　Ａ：達成した　Ｂ：ほぼ達成した　Ｃ：あまり達成しなかった　Ｄ：達成しなかった）

令和４年度　氷見高等学校アクションプラン －１の２－	
重点項目	学習活動（教科実践　教員の活動）
重点課題	地域協働学習とICT教育活用による学びの魅力化
現　状	【地域協働学習について】 ・本校は、令和2年度文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」事業特例校及び富山県教育委員会「未来人材育成事業」の指定を受けている。氷見市の「ひみ教育魅力化会議」等、関係機関及び民間事業者の多くの支援のもと、令和3年度は「未来講座HIMI学」「シチズンシップ」など地域協働学習にのべ204人の外部人材の協力を得て、新学習指導要領が目指す学びのプロセスのうち「学び方を学ぶ」「生きる力を育む」探究学習を実施することができた。生徒の講座に対する満足度は93.5%と高く今年度も1学年「未来講座HIMI学」、2学年普通科「シチズンシップ」においてその取り組みを引き継ぐ。探究学習の学びの価値を校内外で共有しながら周知を図るとともに、カリキュラム構成や評価方法等も新学習指導要領が目指す方向性に鑑みて磨き上げ、今後も継続させる必要がある。 【ICT教育活用について】 ・急速な情報通信技術の進展やグローバル化など生徒を取り巻く環境は大きく変化している。生徒たちの学びの場である学校においてもICTの持つ特長を効果的に活用することにより生徒たちにとってわかりやすい授業を実現し、基礎的、基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力、主体的に学習に取り組む態度の育成など「確かな学力」を育成することができる。そのためにも全教員がICTを活用した授業改善に努める必要がある。
達成目標	①　「地域協働学習」を通して「地域と一体になった学校づくり」を推進し地域との協働体制の確立に努める。生徒が地域をフィールドに学び地域の方々と共に課題を発見したり解決に向けて努力したりすることで主体的に地域づくりに関わる。 ・取り組みに対する生徒の満足度　80％ ②　地域における「地域協働学習」の認知度を高め、相互にとって価値のある取り組みを一層広げるよう努力する。 ・今年度、新たに地域協働学習に参画してくださる外部の方の人数　20人 ・外部協力者の地域協働学習への好評価　80％ ③　多くの教員がICTを活用した授業を実践し、研修や教員相互による授業参観によって、さらなる授業技術の向上を目指す。 ・教員の授業等におけるICT活用　80％
方　策	①　地域学習支援員（氷見市地域おこし協力隊）を中心に氷見市地域振興課をはじめ、大学教授等の協力を仰ぎ、「未来講座HIMI学」、「シチズンシップ」において外部人材との連携を密にする。 ②　「未来講座HIMI学」、「シチズンシップ」の指導計画を「地域協働学習」を柱にまとめ、趣旨等共通理解のもと、探究学習が進められるよう教員も協働し学習する組織を実現する。 ③　全教員がICTを活用した授業の実践と工夫、改善に対応できるよう、教育クラウド利用研修会を実施する。また、 互研授業週間にICTを効果的に活用した研究授業を公開し、参観を促すことで全ての教員がICTを用いた授業展開の研究を進める環境づくりを行う。
達 成 度	①地域協働学習に対する生徒の満足度　92％ ②-1　今年度、新たに地域協働学習に関わってくださった地域の方　25名 －2　本校の地域協働学習に対する地域の方の好評価　100％
	③-1　ICTを活用した授業を行っている教員の割合　96％ －2　ICTを活用した授業改善のために、ICTを活用した授業を参観したり、ICT活用に関する研修に参加したりした教員の割合　80％
具体的な取組状況	①1学年は未来講座HIMI学で、2学年はシチズンシップで、地域の方とともに地域課題解決に取り組み、多くの場で発表するなど、積極的に地域探究学習を実施した。 ②　地域の方が、生徒の地域でのフィールドワークや地域の行事に参加する機会を多く提供してくださったり、学校で特別講座をしてくださったり、 生徒の地域探究学習に積極的に関わってくださった。
	③　互研授業週間を設定し、ICTを活用した授業を見学したり、それに関わる研修に参加したりすることで、ICTを活用した授業のさらなる改善に努めた。
評　価	①　A　　②A
	③A
学校関係者の意見	地域と協働した探究学習において、生徒の満足度は高く、また学習のねらいや取組に対する地域社会からの関心も広がり、一層の成果が期待されている。教職員のICT機器への関心や使用頻度も高く、学校全体でその価値をさらに高めていきたい。
次年度へ向けての課題	一人ひとりの生徒がタブレットを持ち、ICTを活用することで、探究的な学習は学校から家庭、地域へと豊かに広がっていくことが期待できる。そのために、教員の探究的な学習への理解を深めると同時に、ICTスキル向上への取り組みをさらに進めることが必要である。

（評価基準　A：達成した　B：ほぼ達成した　C：あまり達成しなかった　D：達成しなかった）

令和４年度　氷見高等学校アクションプラン －２－

重点項目	学校生活（心身ともに健康で充実した高校生活）		
重点課題	「誇りに思える氷見高校社会」「安心して過ごせる氷見高校社会」の構築に向けての社会観と健康を大切にする意識の育成		
現　状	・さわやかな挨拶を交し合える学校を目指し、定期的に「あいさつ運動」を行っているが、挨拶の価値を心から意識して行う生徒はまだ少ない。また、制服の着こなしや校内における携帯電話の取り扱いに関しても、一部には意識の低い生徒が見られる。「誇りに思える氷見高校社会」を創造することで、自己有用感を持って学校生活を送ることができるようにする必要がある。 ・人間関係における不安や悩みは、常に注視すべきことである。「安心して過ごせる氷見高校社会」を生徒と一体となって創造するという視点で、向上に邁進する学校生活を安定して送ることができるようにする必要がある。 ・一般的に高校へ入学すると、健康診断結果による治療よりも部活動を優先してしまうなど健康管理が疎かになる傾向があるため、自立的な健康管理の意識付けを行う必要がある。特に、歯科検診では、本人が不調を感じていない場合に受診せずに済ませてしまい、治療率が向上しない現状がある。また、コロナ禍のため、治療のタイミングを逃してしまう場合もある。		
達成目標	①　挨拶･服装･交通マナー・携帯電話の取り扱い等の規範意識の向上	②　いじめ撲滅等、「安心して過ごせる氷見高校社会」に関する意識の向上	③　歯科治療率アップのための働きかけ
	生徒意識調査における挨拶や服装等に係る意識率 95%以上	生徒意識調査における「安心して過ごせる氷見高校社会」の創造に対する意識率 100%	歯科治療率　50%以上
方　策	①　「誇りに思える氷見高校社会」をキーワードに、県下一斉による年１回の「さわやか運動」、本校独自による各学期初めの「氷高さわやかウィーク」や年６回の「氷高さわやかデイ」の取り組みにおいて、挨拶の意義を事前指導し、挨拶の価値を意識させながら実施する。また、校風委員会及び交通委員会等の委員会活動として取り組ませることで、生徒の主体性に基づき、「挨拶の励行」「交通安全（自転車乗車マナー等）」「校内における携帯電話の取り扱いについて」など社会的マナーの向上に努める。 ②　「安心して過ごせる氷見高校社会」をキーワードとして、様々な活動を展開する。具体的には、集会等で「命の尊重」を訴えるとともに、学期ごとを基本にアンケートを実施することで、人間関係に関する悩みや問題行動を早期に把握する。さらに、得た情報をもとに、迅速かつ周到に対応する体制を構築する。		③　・保護者会の際に歯科治療カードを再度配布し、長期休業中などに治療するように促す。 ・クラスごとの治療率に差が生じるため、状況を集約して担任にも知らせ、個々の生徒に必要性を確認し、指導する。 ・コロナ禍における県内の感染状況が落ち着いている時期や、３年生の入試の落ち着いた時期を見計らい、タイミングよく治療を促す。
達 成 度	①　社会規範の重要性を意識している生徒の割合 97%	②　安心して過ごせる氷見高校社会の創造を意識して生活している生徒の割合 83%	③　歯科治療率　37%
体的な取組状況	①　年に１回の高校生さわやか運動を、氷見市社会福祉協議会等の福祉団体や氷見署、地元小中学校と連携して行い、挨拶・服装、交通マナー等に対する意識の向上に努めた。校内で学期初めに「さわやかウィーク」月の初めに「氷高さわやかデイ」を実施した。 ②　いじめや類する行動について生徒を注意深く観察するとともに、定期に全体指導といじめ等の被害に対するアンケートを実施し、職員間の連携と情報共有をはかりつつ、きめ細やかな指導を実施した。		・保護者会の際に、歯科治療カードを再度配付し、保護者に協力をお願いした。 ・未受診者を個別に確認し、各クラスの担任からも声をかけてもらった。 ・３年生には、大学受験などが終了した２～３月に向けても治療を促している。
評　価	①　A	②　B	③　D
	校内外での挨拶・服装等の社会規範に対する生徒の意識は概ね良好である。	いじめやそれに類する行為には、学校全体の協力体制のもと対応できている。	現段階では、昨年までと同程度であり、冬期休業後、徐々に上昇しつつある。
学校関係者の意見	部活動の活躍や地域の方々との連携した活動などにより、社会との交わりがまし、氷見高校を誇りに感じる意識が高まっているようである。人間関係に関する悩みのサポートを職員が協働して進め、生徒が安心して過ごせる学校社会の構築に向け、一層努力してほしい。		中学までは医療費無料措置があるが、氷見市では次年度より高校生までが無料化となる。それをきっかけに治療率を高めたい。
次年度へ向けての課題	①　社会規範の遵守に加え、氷見高校生の矜持をもって主体的に行動する心の啓蒙の在り方を検討する。 ②　生徒が安心して学習その他の活動に取り組むことができるよう、いじめの防止等の対策を検討する。		③　受験・就職などにも影響されるので、タイミングを見ながら声をかける。

（評価基準　A：達成した　B：ほぼ達成した　C：あまり達成しなかった　D：達成しなかった）

令和４年度　氷見高等学校アクションプラン －３－		
重点項目	進路支援（生徒の進路実現と進路指導）	
重点課題	進路意識・知識の強化と組織的な進路指導力向上の取り組み	
現　状	・進路実現の過程は複雑であり、職業や上級学校についての理解度や、進路決定の方策（入学試験、就職試験など）に対する基礎的、基本的な知識量に課題がある。進路学習等、進路実現に向けた生徒の主体的な活動ペースを向上させる必要がある。 ・１～２学年の全体的な進路学習の機会は、タイトなスケジュールの中で限られている。生徒自身が進路について継続的に考え、職業や「なりたい自分」について話をする雰囲気を醸成する必要がある。高い志を持って進路実現に挑戦する生徒を育成する体制強化が重要である。 ・３学年は、9月の就職試験から3月の国公立大学後期日程まで7か月にわたる多様な受験を指導・サポートする。5学科それぞれの特性と個々の生徒が培ってきた様々な学力が、進路選択と受験にメリットとなるよう、学年、教科、各部署との連携をより密にする必要がある。 ・面談技術や受験情報の収集・提示方法、保護者との連携など、進路指導のノウハウを蓄積・向上させる体制の充実を図る必要がある。	
達成目標	①　進路実現の手立てについて、生徒の理解と主体的な行動の促進	②　進路関連行事や個人面接等の充実と進路意識の高揚
	・学校行事以外の大学等見学、企業見学やオープンキャンパスへの参加率 （オンライン参加含む） 1学年＝40％以上、2学年＝50％以上3学年＝75％以上	・進路統一ホームルームや大学等見学の満足度70％以上 ・生徒が感じる面接等の満足度80％以上
	③　進路希望の実現 （第３学年　進学希望者）	④　進路希望の実現 （第３学年　就職希望者）
	・３年９月進路希望調査(校種)に対し 普通科　：第一志望達成率　70％ 専門学科：第一志望達成率　80％	・就職希望者の就職内定率　100％
方　策	・キャリア学習と進路の手立てを知る機会を設けるなど、各学年に応じた計画的な進路指導を行うことで、早期に自己の適性の理解及び将来設計を具体化させ、意欲的に学習ができるように指導する。 ・進路に関するホームルームを実施し、より効果的な系統指導プログラムを作成して、学年全体での計画的な指導体制の共有化を図る（進路統一ホームルームを年３回程度実施） ・各学年と連携し、３年間を見通した進路指導を行う。 １年次･･･「進路講話」「職業人から学ぶ」「文理選択」「進路ガイダンス」「卒業生と語る会」他 ２年次･･･「大学等見学」「修学旅行（班別研修）」「学部学科の研究」「卒業生と語る会」「インターンシップ」他 ３年次･･･「大学見学」（普通科）「進路ガイダンス」「オープンキャンパス」「就職説明会」「企業見学」「進学検討会」他 ・「面接重点期間」をおおむね学期ごとに設定し、複数教員で情報共有を図る体制を推奨、実践する。 ・学力と進路情報について校内ネットワークを利用し、教員間で共有する。また、Google classroomを使用して、生徒への情報提供やアンケート調査等を行う。	
達成度	①　アンケート「企業見学・オープンキャンパス（オンライン含む）に参加したか」 普通科　1年=4%　2年=86%　3年=63% 専門学科　1年=3%　2年=31%　3年=84%	②　学校生活アンケート 「ホームルームなど進路行事を通して的確な進路情報が得られているか」 普通科　1年=92%　2年=95%　3年=88% 専門学科　1年=83%　2年=88%　3年=88% 「進路を決める上で担任との面接は役に立っているか」 普通科　1年=84%　2年=92%　3年=94% 専門学科　1年=83%　2年=80%　3年=93%
	③　普通科　第一志望達成率87.0% 専門学科　第一志望達成率92.6%	④　就職希望者43名全員内定
具体的な取組状況	①進路指導部から取組に対する適切な助言ができなかった。	②　昨年度までのアンケートは「進路についての指導・面談がよく行われている」であったが、内容についての回答割合で達成度を確認。
	③　進路希望の実現 国公立大学合格者 20 名	④　就職希望者は、公務員も含め全員第一希望どおり内定を得た。
評　価	①　1年　D、2年　A、3年　B	②　A
	③　A	④　A
学校関係者の意見	1 学年では総合的な探究の時間で進路指導の時間の確保ができず、カリキュラムを見直しを行い、探究的な学びを進路実現に繋げる取組が求められる。コロナ禍に悩まされた卒業生の推薦入試指導について検証が必要である。	
次年度へ向けての課題	進路指導部が主体となり、キャリア教育をより充実させることが重要である。進学においては推薦入試での生徒の適性を見極め、アドバイスをする必要がある。就職についても本人の適性、就職後の持続性等を生徒自身が判断していけるように努めたい。	

（評価基準　A：達成した　B：ほぼ達成した　C：あまり達成しなかった　D：達成しなかった）

令和４年度　氷見高等学校アクションプラン －４－

重点項目	特別活動		
重点課題	コロナ禍における学校行事・部活動及び地域連携活動の活性化		
現　　状	・学校行事は、今年度も、コロナ禍での実施が予想される。昨年度は、生徒会執行部を中心に、コロナ禍でも取り組める企画・運営を行った。その結果、参加意識や達成感を感じた生徒が増えた。今年度も、生徒の意見を取り入れながら、生徒中心の行事となるよう、工夫して実施したい。 ・部活動は、全校生徒の約90%が加入しており、生徒の自己肯定感の向上に大いに寄与している。今年度も、コロナ禍で活動制限のあるなか、明確な活動計画と集中した時間活用の工夫が必要である。また、生徒が前向きになれるような支援も求められる。 ・今年度、コロナ禍で自粛してきたボランティア活動を再開する動きが目立つ。地域の美化活動だけではなく、ボランティア推進委員会を中心に家庭クラブやＪＲＣ部等とも連携し、ボランティア活動に参加する生徒を増やしていく必要がある。		
達成目標	① 各学校行事の内容の充実	② 部活動に参加することで自己肯定感を高める生徒の増加	③ SDGsに基づくボランティア活動への参加意識の高揚
	各行事に対する生徒の満足度　80%以上	３学年生徒の満足度　80%以上	美化活動、環境保全活動、募金活動への全校生徒の意欲的参加
方　　策	① 各行事の前に各種委員会の開催や生徒会便りの発行を行い、行事についての実施要項等を周知していく。また、行事後にアンケートを行うことで、生徒の達成感が高まるよう改善点を加え、次年度に活かすよう工夫する。 ② 部活動で人間性の向上を図ることの大切さを全校生徒に意識させつつ、メリハリのある取り組みを促す。３年生に、アンケートで部活動に対する意識調査を行い、結果を各部顧問に知らせ、前向きなれるよう支援活動に生かす。 ③ ボランティア推進委員会を中心に、SDGsを意識したボランティア活動のポスターの掲示や放送などを通して、全校生徒に積極的な参加を呼びかけるとともに、ボランティア後の記録や感想を残すなど振り返りの機会を設ける。		
達　成　度	① 各行事に対する満足度　９２％ １年９１％　２年９６％　３年８９％ ② 部活動に対する満足度（３年対象） ８５％	③他団体との活動、地域の美化活動参加　１年１５％　２年２５％　３年２７％ エコキャップ・コンタクトレンズケースの回収、募金活動、書き損じはがきの回収、オレンジリボン運動は実施。 氷見ユネスコ協会・氷見市身体障害者協会・こども食堂と連携。	
具体的な取組状況	体育大会では、生徒会執行部が主導し、ソーシャルディスタンスを考慮した競技を実施した。また、指定場所での３年生保護者の観覧を許可した。氷高祭は、生徒会執行部を中心に、コロナ禍前に近い内容での展示発表を実施した。本館展示以外での本校生徒家族の観覧を許可した。部活動では、多彩な部活動を運営できるよう顧問の配置、予算運用等適正に対応した。		
評　　価	①Ａ　体育大会や氷高祭について、感染防止対策は必要ではあるが、コロナ禍前の内容に戻りつつあり、満足度は高い。 ②Ａ　引退した生徒の満足度は高い。生徒会アンケートの結果（充実度、理由、改善要望）を顧問に知らせていく。	③Ｂ　外部団体のボランティア活動はまだまだコロナ禍前に戻っていない。 募金活動等の活動を継続していくことが必要である。	
学校関係者の意見	今年度はコロナ禍にもかかわらず、各種行事においてコロナ以前に近い形で実施できるよう生徒会、教職員が一体となって取り組み、その結果生徒の満足度は高いものとなり評価される。校外での様々なボランティア活動が高い評価を受けている。		
次年度へ向けての課題	コロナ禍で規模を縮小し、様々な対策を実施しての学校行事であったが、コロナ禍前の企画、運営に近づきつつあることを実感できた。部活動においても大会が中止されることなく開催され、生徒たちのモチベーションの向上がみられた。ボランティア活動においても積極的参加が期待される。今後もより多くの生徒が自主的、積極的に学校行事、部活動、ボランティアに参加できるよう企画や運営方法を工夫していく。		

（評価基準　Ａ：達成した　Ｂ：ほぼ達成した　Ｃ：あまり達成しなかった　Ｄ：達成しなかった）

令和４年度　氷見高等学校アクションプラン －５－

重点項目	その他（情報発信及び家庭との連携）	
重点課題	適切な情報発信及び保護者との情報共有の推進	
現　状	・家庭との連携を図るために、ＰＴＡ活動への積極的な参加を呼びかけている。令和２年度はコロナ禍により中止となった。令和３年度は感染状況を踏まえ、感染拡大防止対策の徹底、内容を精選し、時間を短縮してＰＴＡ総会等を開催した。総会への参加保護者数は、25.9%。３年専門学科研修会74.1%、３年普通科研修会84.5%コロナ禍にあっても３学年PTA研修会のニーズは高く、参加率は増加している。 ・令和元年度より「PTAと生徒の懇談会」を開催している。昨年度も２回の懇談会を実施し、学校生活や部活動に必要な物品などの要望について話し合い、より充実した学校生活を送ることができるよう予算内で優先順位を協議し整備できた。PTA研修会をはじめとする様々なＰＴＡ行事について、十分な新型コロナウイルス感染防止対策をとったうえで実施していかなければならない。 ・学校と保護者との情報共有手段として、「氷高ほっとメール」（教育情報メール）」への登録を毎年保護者に呼びかけている。保護者の「氷高ほっとメール」に対する理解は深まり、近年の登録率は高い水準で安定している。昨年度は96.3%であった。	
達成目標	①　コロナ禍におけるＰＴＡ活動への参加率80% ②　不参加者への的確な対応100%	③　教育情報メール「氷高ほっとメール」の保護者登録率の向上
	・安心して参加できる新型コロナウイルス感染防止対策の実施。 ・感染状況を考慮した、書面やリモートなど安全なＰＴＡ活動の実施。 ・ＰＴＡ会報、ＨＰなどを利用した不参加者への周知の工夫。	・97%以上
方　策	・行事の開催案内の配布、ホームページ、メールでの情報配信を行い、ＰＴＡ活動への参加を促す。 ・保護者の関心が高いＰＴＡ活動においても、新型コロナウイルス感染状況によっては参加しにくい場合もある。感染防止対策をしっかりとり、安心して参加してもらえるようにする。 ・感染状況を考慮して、ＰＴＡ役員と協議のうえ、開催形式について検討する。 ・参加できなかった保護者へ資料配付だけではなく、活動報告、意見、質問事項などを追加し、今後のＰＴＡ活動に理解と協力を求める。	・合格者説明会やＰＴＡ入会式等の機会をとらえ、「氷高ほっとメール」の利用価値が大きいことをしっかり伝え、保護者の登録を促す。 ・入学以降は、特に１学期を登録推進期間として引き続き保護者に登録を勧める。 ・「氷高ほっとメール」の登録をしても受信許可の設定がされていないか、アドレスに誤りがあって届かない保護者には生徒を通じて案内をする。 ・利用者に満足度に関するアンケートを実施し、利便性の向上を図る。
達成度	①　コロナ禍におけるＰＴＡ活動への参加率 62.3% ②　不参加者への的確な対応 100%	③　97.1%
具体的な取組状況	①　ＰＴＡ研修会での感染対策の徹底を、学年便り、担任からの連絡で徹底 ②　・感染対策の徹底、資料の配付、広報を通しての活動報告 ・広報（年２回）、学年だより（年４～５回）による行事予定、活動報告、PTAへの働きかけ。	③　・引き続き登録フォームをＨＰに載せ、入学説明会と入学式当日、新入生の保護者に登録をお願いした。 ・「ほっとメール」の発信ごとに新規申込者を登録した。 <table><tr><th>登録率</th><th>R3年度</th><th>R4年度</th></tr><tr><td>全体</td><td>９６．０%</td><td>９７．１%</td></tr><tr><td>1年</td><td>９７．１%</td><td>９６．５%</td></tr><tr><td>2年</td><td>９７．０%</td><td>▲９７．５%</td></tr><tr><td>3年</td><td>９４．０%</td><td>▲９７．４%</td></tr></table>
評　価	B	A
	・５月のＰＴＡ総会については感染対策を徹底し開催できたが、参加率はコロナ禍の以前の参加率と同等の低い結果となった。内容の工夫が必要である。各学年の研修会については、前年より出席者が増加していることから、総会は参加者全体のためになる講演会等の企画を検討する必要がある。	・全学年で登録率が高くなり、目標を達成することができた。
学校関係者の意見	・今回の結果から保護者はＰＴＡ研修など、内容に価値を求めていることが想像される。今後、魅力ある内容への検討が重要となる。	・天候不順や自然災害、クマ情報など保護者との連絡の頻度は高まっており、登録率が100%に向けて一層努力したい。
次年度へ向けての課題	・PTA総会の内容、各議案の承認方法についてPTA役員の業務削減や出席する会員の負担を減らす書面決議も踏まえての検討したい。	・登録者のうち不着が数件ある。生徒を通じてアドレスや受信許可設定の確認をお願いしているが、なかなか改善されないため、問題に応じた対策を検討したい。

（評価基準　Ａ：達成した　Ｂ：ほぼ達成した　Ｃ：あまり達成しなかった　Ｄ：達成しなかった）